

柏島の海



原田 淳 ・ 原田 裕子

目次

まえがき

1章 柏島の海について

2章 柏島のさかな

3章 柏島のハゼ

4章 柏島のエビ

5章 柏島のカニ・異尾類

6章 柏島の貝・ウミウシ

謝辞

参考文献

まえがき

高知工科大学在任中に、情報図書館ロビーにて「柏島の海」をテーマに4回の写真展を開催した。本稿は、その際の写真と説明文をもとに編集したものである。したがって、全体の構成は、1章が「柏島の海について」、2章から5章まで4回の展示テーマごとに「柏島のさかな」、「柏島のハゼ」、「柏島のエビ」、「柏島のカニ・異尾類」、6章は展示しなかったテーマ「柏島の貝・ウミウシ」とした。

撮影者は、本稿の筆者である原田淳と原田裕子の二人である。二人とも、柏島で水中写真を撮影するに際し、当初は、習作として図鑑的な写真を撮っていたが、撮影技術が安定するにつれて、自分自身のスタイルを考えるようになった。いつもいっしょに潜り、協力しながら撮影をしても、構図をはじめとして作風に違いがでてくる。そうした部分も楽しんでいただければと思う。

1章 柏島の海について

柏島は、四国の西南端にある周囲4km程の小さな島である。黒潮の影響を受け、熱帯産と温帯産の魚類が混生している。写真1. 1は、柏島の全景である。一切休憩所より撮影したものである。柏島の奥に見えるのは、沖ノ島である。



写真1. 1 柏島の全景

日本沿岸では現在約3500種の魚が確認されている。柏島においては、未記載種(新種)・日本初記録種を含めて、約1000種近くが確認されているので、日本で見られる魚の約三分之一が柏島の周りに棲息しているということになる。

これほどの魚種が確認されたのは日本の他の地域では例がなく、柏島の特異な立地条件に基づく豊かな生物相を物語っている。柏島の海が最も特徴的なのは、その豊かな海が人々の生活に密接に関連している沿岸に位置しているということである。

もちろん、魚類だけでなく、その他の生物相も豊富で、甲殻類なども温帯の海ではなかなか見ることのできない種類が見られる。

この柏島の海にはじめて潜ったのが、今から10年前のことであった。陸上の雰囲気
が四国の小さな漁村であったにもかかわらず、いったん海の中に入ってみると、そこ
には見事なまでのテーブル珊瑚の群生が広がり、色とりどりの魚たちが群れていた。
そのときの鮮烈な印象は、いまでもしっかりと脳裏に残っている。以来、夏はもちろん
のこと、冬も柏島で潜り、写真を撮り続けてきた。

平成16年以降、台風やシロレイシガイダマシの食害などにより、柏島の珊瑚は大
きなダメージを受け、かつてのテーブル珊瑚の大群生は見る影もなくなってしまった。
かつての柏島の海を知るものにとっては寂しい限りである。しかし、黒潮実感センター
をはじめとして、地元の人々は、かつての美しい海を取り戻そうとして日々、さまざま
な努力をしている。ぜひ、こうした取り組みが功を奏して、再び、柏島が美しい珊瑚の
海となることを願ってやまない。

2章 柏島のさかな

本章で取り上げるのは、写真として面白みのある少し変わったフォルムの魚、色のきれいなハナダイのなかま、そして、海の青さが感じられる写真を選んだ。魚類のうち、ハゼは次章で紹介する。

2.1 アデウツボの幼魚

ウツボの仲間では図鑑などには希種と書かれており、特に成魚は水深100～150mに棲むと記されている。柏島では、比較的浅い深度に幼魚が定着している。口の中が鮮やかな黄色をしている。



写真2.1 アデウツボの幼魚

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -22m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

2. 2 ハナヒゲウツボ

ハナヒゲウツボの成魚は、写真2. 2のように青と黄色が鮮やかで、英名では Ribbon Eelと呼ばれている。幼魚は、写真2. 2. 2のように、黒と黄色をしている。幼魚も成魚も砂地にある穴から頭を出して、時おり頭を振る様子を見せる。



写真2. 2 ハナヒゲウツボ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -25m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=5.6, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL



写真2. 2. 2 ハナヒゲウツボの幼魚

撮影者：原田 淳

ポイント：一切小島 -22m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

2.3 チンアナゴ

砂地の穴から体を出して、ゆらゆら揺れている。潮の流れてくる方向に向かって、流れてくる小さなプランクトンなどを捕食している。ダイバーが近づくと、穴のなかに隠れてしまうため、アプローチをうまくやらないと写真は撮れない。



写真2.3 チンアナゴ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -27m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

2.4 キリンミノ

ミノカサゴの仲間である。3cmほどの小さな個体でだが、カメラを向けると、威嚇のためか、ひれを全開にした。



写真2.4 キリンミノ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -20m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

2.5 ポロカサゴ

とてもきれいな紫色をしているが、名前はポロカサゴという。皮弁や体に水玉模様が入っているのが特徴である。希種とされているが、柏島ではわりとよく見つかっている。砂地をジャンプするように移動していた。色彩変異のバリエーションがあるため、紫色以外にも赤みがかかった個体や、白っぽい個体なども見られる。



写真2.5 ポロカサゴ

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -25m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

2.6 クマドリイザリウオ

クマドリという名前は、歌舞伎の隈取りのような模様が由来である。手足のように変化した胸びれを使って歩くように移動するのを見ることができる。イザリウオというのは、この歩くような動きからきているが、標準和名は差別的表現につながるということで、カエルアンコウに改訂された。



写真2.6 クマドリイザリウオ

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -20m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

2.7 エナガイザリウオ

手のように変化した胸びれで体を必死に支えている姿が可愛く見える。しかし、肉食性の魚であり、短期間でどんどん大きくなる。



写真2.7 エナガイザリウオ

撮影者：原田 裕子

ポイント：さるがうど -12m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

2.8 オオモンイザリウオ

イザリウオの一種であり, この個体は大人の手のひらよりも大きい. エスカと呼ばれる疑似餌を振って, 小さな魚をおびきよせて食べる.



写真2.8 オオモンイザリウオ

撮影者: 原田 裕子

ポイント: 後浜 -16m

カメラ: Nikon F4, レンズ: AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング: Nexus F4Pro, ストロボ: SB-105, フィルム: RVP100

絞り: f=11, シャッタースピード: 1/60, 発光量: TTL

2.9 ベニイザリウオ

イザリウオは、泳ぐこともできるのだが、なかなか泳ぐ姿は見られない。頭部にエスカという疑似餌があり、これを巧みに振って小さな魚をおびきよせて食べる。捕食の瞬間の素早さは、ふだんののっそりした動きからは想像できないものである。



写真2.9 ベニイザリウオ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -22m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

2. 10 ニシキフウライウオ

タツノオトシゴの仲間で、これでも立派な魚である。季節来遊魚で、南方の海から黒潮や台風で運ばれてきて、柏島では初夏から秋にかけて見ることができる。色彩変異のバリエーションは多く、個体の色によってムチカラマツやガンガゼの棘の間などに擬態する。この写真は、ムチカラマツの間にいた個体が移動をはじめたところを撮影したものである。

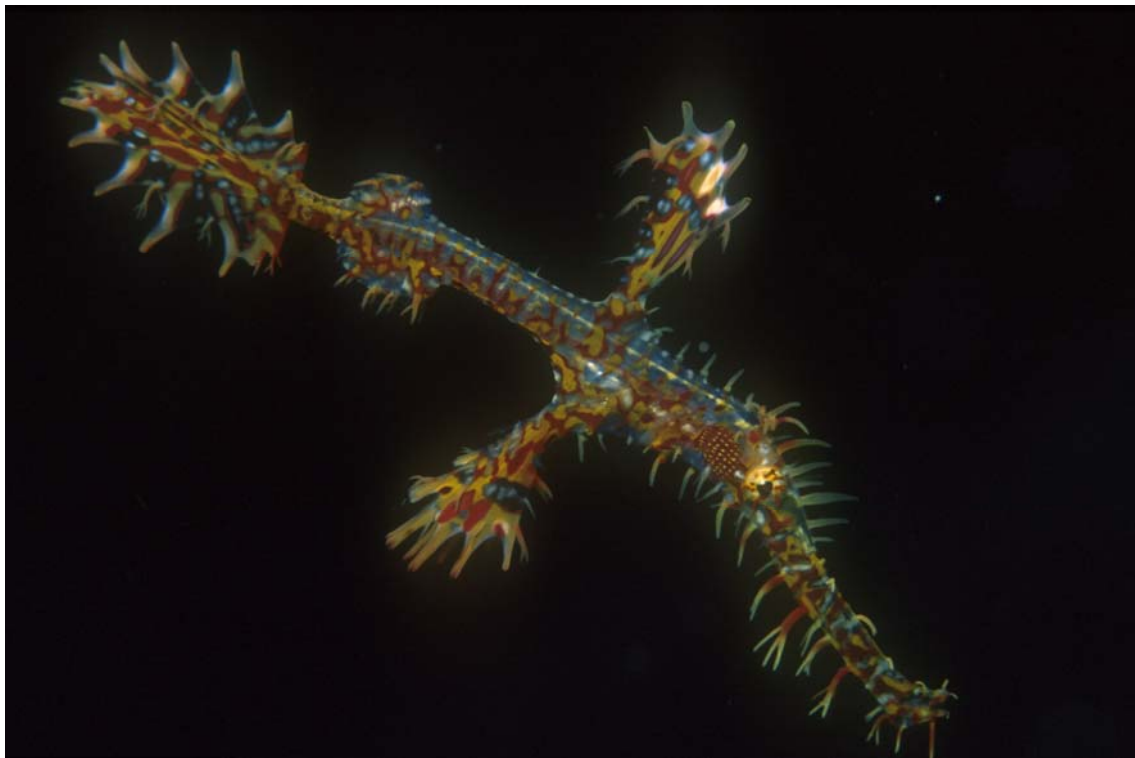


写真2. 10 ニシキフウライウオ

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -17m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

2. 11 ピグミーシーホース

タツノオトシゴの仲間では、もっとも小さい種類のひとつである。赤やピンク、白など住みかとなるソフトコーラルの色によって、さまざまな色の個体がいる。写真2. 11はピンクの個体である。



写真2. 11 ピグミーシーホース

撮影者：原田 裕子

ポイント：一切小島 -37m

カメラ： Nikon F4, レンズ： AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング： Nexus F4Pro, ストロボ： SB-105, フィルム： RVP100

絞り： f=11, シャッタースピード： 1/60, 発光量： TTL

2. 12 ピグミーシーホース

名前のおり, タツノオトシゴの仲間のうち, 最も小さな種類のものである. まだ和名は決まっていない. ソフトコーラルの一種であるウミウチワのポリプにうまく擬態する. そこにいることを知らないと探すのは困難である.



写真2. 11 ピグミーシーホース

撮影者: 原田 淳

ポイント: 後浜 -27m

カメラ: Nikon F4, レンズ: AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング: Nexus F4Pro, ストロボ: SB-105, フィルム: RVP

絞り: f=11, シャッタースピード: 1/60, 発光量: TTL

2. 12 カエルアマダイ

カエルアマダイは穴を掘って、ふだんは、そこから顔だけを出して周囲の様子をうかがっている。卵は孵化するまでオスが口の中で育てる。抱卵中は、警戒して穴の上に自分で石などをのせてフタをすることが知られている。

愛嬌のある顔をしているので、ダイバーには人気がある。



写真2. 12 カエルアマダイ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -22m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D+CL-90,

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

2. 13 カエルアマダイ

大きな目をくりくりとさせて、あたりの様子をうかがう臆病者である。



写真2. 13 カエルアマダイ

撮影者：原田 裕子

ポイント：さるがうど -16m

カメラ： Nikon F4, レンズ： AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング： Nexus F4Pro, ストロボ： SB-105, フィルム： RVP100

絞り： f=11, シャッタースピード： 1/60, 発光量： TTL

2章

2. 14 クダゴンベ

口先がとんがっているのが名前の由来である。肉食性で、エビや小さな魚などを捕食する。全体像は、写真2. 14. 2に示す。



写真2. 14

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -37m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：EBX

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL



写真2. 14. 2 クダゴンベ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -24m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

2.16 キンセンイシモチ

イシモチの仲間は、メスの産んだ卵をオスが口の中で育てることが知られている。まだ産卵直後なのでピンク色をしているが、2~3日もすると小さな目が見えるようになり、銀色に変わっていく。じっくり観察していると、時折、卵を吐き出しては口に入れ直す行動を見ることができる。卵全体に酸素が行き渡るようにしていると考えられている。



写真2.16 キンセンイシモチ

撮影者：原田 裕子

ポイント：勤崎 -20m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

2. 17 ゴンズイ

ゴンズイは海に住むナマズの仲間である。いつもこのように群れて移動している。ダイバーはこれをゴンズイ玉と呼んでいる。ひれに毒があるので、観察や撮影の際には注意が必要である。



写真2. 17 ゴンズイ

撮影者： 原田 淳

ポイント： 後浜 -22m

カメラ： Nikon F4, レンズ： AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング： Nexus F4Pro, ストロボ： SB-105, フィルム： RVP100

絞り： f=11, シャッタースピード： 1/60, 発光量： TTL

2. 18 アオサハギの幼魚

カワハギの仲間で、小型の種で丸い体型をしているため、かわいらしい。背景がきれいなソフトコーラルの中などを泳いでいることが多いため、写真の被写体として好まれる。

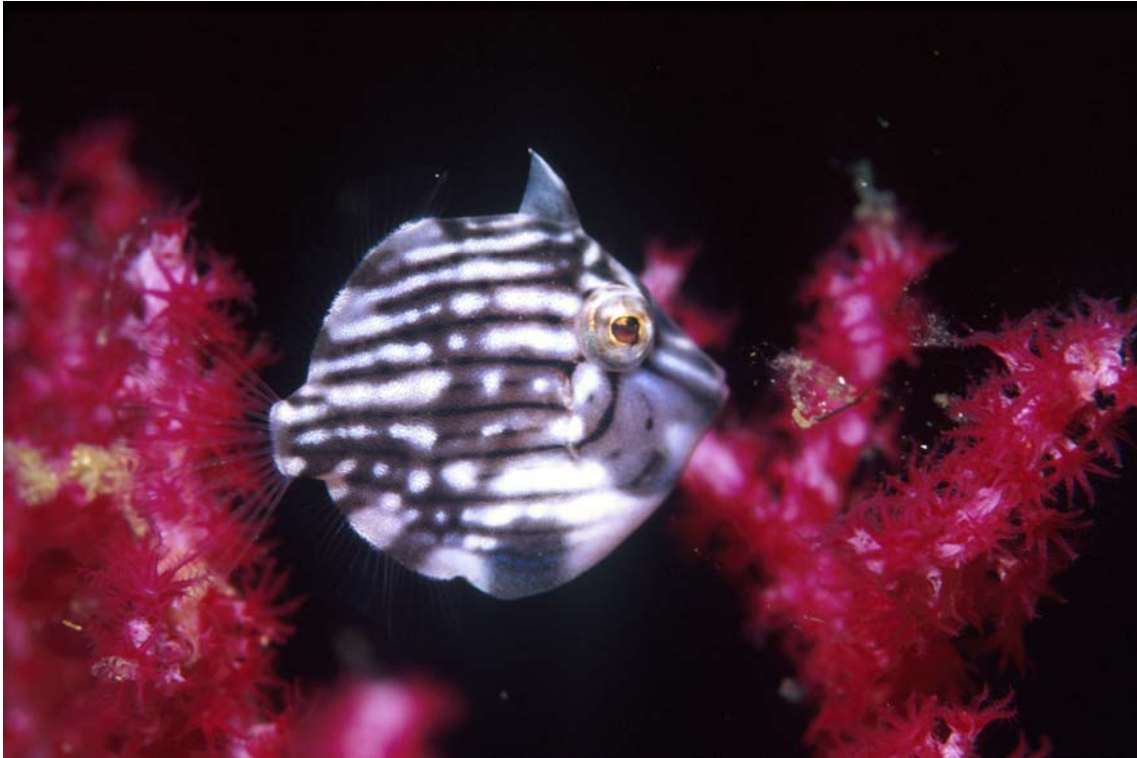


写真2. 18 アオサハギの幼魚

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -24m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

2. 19 アカオビハナダイ

オスに見られる体側の赤い帯が名前の由来である。婚姻色が出ており、非常に鮮やかな色になっている。生息する深度は、やや深い。



写真2. 19 アカオビハナダイ

撮影者：原田 裕子

ポイント：さるがうど -42m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

2. 20 アサヒハナゴイ

非常にあでやかな色のハナゴイである。ハナゴイを撮影するときの基本は、真横からひれを開いたところを撮ることであるが、より近くで撮影するために斜め前からの構図をとった。



写真2. 20 アサヒハナゴイ

撮影者：原田 淳

ポイント：勤岬 -45m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

2. 21 フタイロハナゴイ

名前のおり体側の色が2色に分かれている。まだ小さな個体であるため、体色に透明感がある。背景に見えるのは、少し大きくなった個体である。



写真2. 21 フタイロハナゴイ

撮影者：原田 淳

ポイント：さるがうど -42m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

2. 22 ケラマハナダイ

背びれに赤い斑点があるのがケラマハナダイのオスの特徴である。一般的にハナダイの仲間はオスが派手で、メスは地味である。



写真2. 22 ケラマハナダイ

撮影者：原田 淳

ポイント：さるがうど -42m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

2章

2. 23 キビナゴ

柏島の豊かな海を象徴するのがキビナゴである。ダイビングが終わりに近づいて、ボートの下で安全停止をしていると、キビナゴの群がやってきた。

獲れたばかりのキビナゴのお造りは知る人ぞ知る絶品である。



写真2. 23 キビナゴ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -5m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

2. 24 キビナゴ

水中でキビナゴの群れに遭遇した。太陽を覆い隠すほどの大きな群れが、ヒラマサやクロヒラアジなどに追われて、右に左に舞うように泳ぐ。

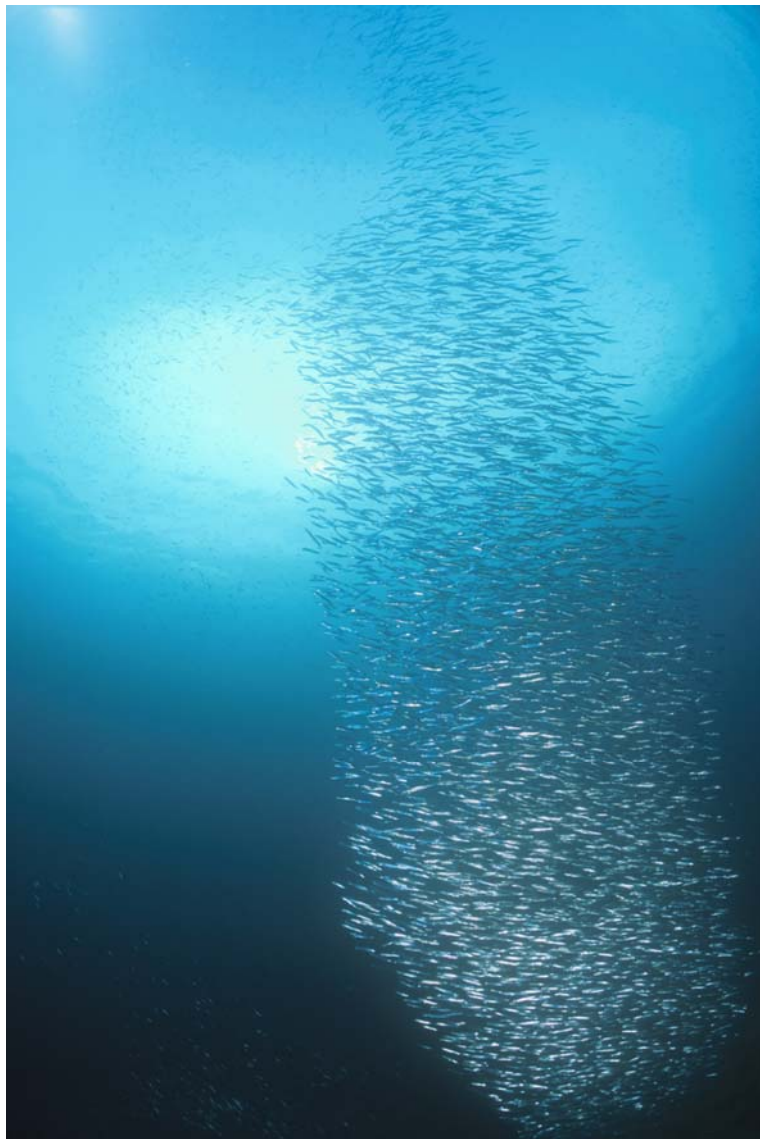


写真2. 24 キビナゴ

撮影者：原田 淳,

ポイント：民家下 -12m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Fisheye-Nikkor 13mm f2.8

ストロボ：SB-105, フィルム：RDPⅢ

絞り：f=5.6, シャッタースピード：絞り優先オート, 発光量：1/4発光

2. 25 キビナゴを追うハナミノカサゴ

水中でキビナゴの群れに遭遇した。ハナミノカサゴがその群れを追いかけている。ハナミノカサゴは速くは泳げないのだが、生きるためには必死に泳いでいる。

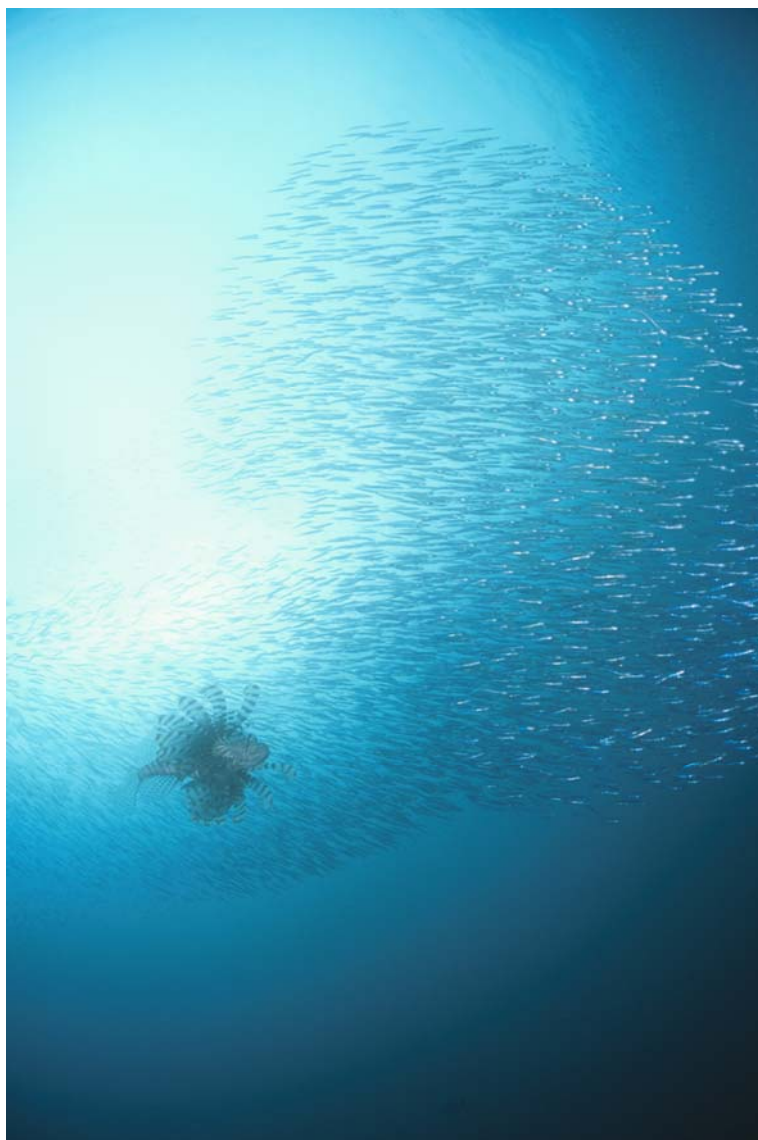


写真2. 25 キビナゴを追うハナミノカサゴ

撮影者：原田 淳

ポイント：民家下 -12m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Fisheye-Nikkor 13mm f2.8

ストロボ：SB-105, フィルム：RDPⅢ

絞り：f=5.6, シャッタースピード：絞り優先オート, 発光量：1/4発光

2. 26 アザハタとスカシテンジクダイ

小さな岩の上にスカシテンジクダイが群れており、アザハタがその中を泳ぐ瞬間をねらった。この岩におけるアザハタの役割は、支配者であり守護者でもある。



写真2. 26 アザハタとスカシテンジクダイ

撮影者：原田 淳

ポイント：民家下 -15m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Fisheye-Nikkor 13mm f2.8

ストロボ：SB-105, フィルム：RDPⅢ

絞り：f=5.6, シャッタースピード：絞り優先オート, 発光量：1/4発光

2. 27 スカシテンジクダイ

小さな岩の上に群れているスカシテンジクダイが広がる瞬間をねらって撮影した。呼吸をすると排気で群れが散るので、息をこらえての撮影である。



写真2. 27 スカシテンジクダイ

撮影者： 原田 淳

ポイント： 民家下 -15m

カメラ： Nikonos RS, レンズ： R-UW AF Fisheye-Nikkor 13mm f2.8

ストロボ： SB-105, フィルム： RDPIII

絞り： f=5.6, シャッタースピード： 絞り優先オート, 発光量： 1/4発光

2. 28 サンゴの群生

沖ノ島で撮影したサンゴの写真である。サンゴの美しさと透明度の良さがないと、こういう写真は撮影できない。



写真2. 28 サンゴの群生

撮影者：原田 淳

ポイント：沖ノ島 -13m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Fisheye-Nikkor 13mm f2.8

ストロボ：SB-105, フィルム：RDPIII

絞り：f=5.6, シャッタースピード：絞り優先オート, 発光量：1/4発光

3章 柏島のハゼ

この章では、柏島のハゼについて取り上げる。柏島のハゼは、共生ハゼとそれ以外のハゼに分けることができる。共生ハゼは、ネジリンボウ属をはじめとして、テッポウエビの仲間と共生しているハゼのことをいう。エビが掘った穴にいつしよに住むことから、共生ハゼと言われている。

なぜ、テッポウエビとハゼが共生するのか明らかにされていないが、テッポウエビは住まいを提供し、エビよりも目のいいハゼが見張り役をつとめているという説明が一般的である。撮影しながら観察していると、エビの触角はハゼの尾ビレに触れており、ハゼが危険を感じると尾ビレを振るわせてエビに合図を送る様子が見られる。エビが巣穴に入る前にハゼが逃げることはない。

共生ハゼを撮影するには、ハゼに警戒心を持たせないように、じわじわとアプローチしなければならない。ときには、一旦カメラを引いて、ハゼがホバリングするのを待ってから、再び距離をつめたりという、微妙なかけひきが必要となる。

写真としては、ヒレを開いたところを撮らないと意味がないので、シャッターを切るタイミングも重要である。しっかりしたダイビングスキルとねばり、そして反射神経も必要な撮影である。

共生ハゼは、ある決まった種類のテッポウエビと共生することが知られている。たとえば、ネジリンボウは、ニシキテッポウエビと共生するのが一般的であるが、ヤシャハゼやキツネメネジリンボウは、ランドール・ピストルシュリンプとの組み合わせがほとんどである。また、クビアカハゼは、コシジロテッポウエビの仲間と共生している。広い海の中で、どうして特定のテッポウエビと共生ハゼがペアを組むのか、また、どのようにして特定のペアが完成するのか、不思議な謎である。

共生ハゼ以外にも、巣穴を持つハゼがいる。アケボノハゼ、スジクロユリハゼ、ハタタテハゼなどである。こうしたハゼも、ていねいにアプローチしないと巣穴に逃げてしまう。また、決まった住みかを持たないハゼも不用意に近づくと、岩のすき間やソフトコーラルの中に隠れてしまうので、やはり撮影には技術が必要であり、時間もかかる。ハゼの撮影は時間がかかり、難しいところがある反面、いい写真が撮れたときの喜びも大きいのである。

3章

3.1 スジクロユリハゼ

深海の貴公子ともいうべき、色鮮やかできれいなハゼである。-40m前後の深度から見るができるが、警戒するとすぐに穴のなかに隠れてしまうので、アプローチには細心の注意が必要である。ハゼの撮影では、ヒレを開くまでただひたすらにじっと待つことになるが、特にスジクロユリハゼはヒレが全開になると息をのむような美しさである。



写真3.1 スジクロユリハゼ

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -36m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

3. 2 ホタテツノハゼ

大きな背ビレと顔の所にある二つのツノのようなものが特徴のハゼである。背ビレを開くのは、警戒したときで、撮影しようと近づくと、背ビレを開いたり閉じたりする。警戒しているときに、むやみに近づくと、すぐに巣穴に逃げ込んでしまう。



写真3. 2 ホタテツノハゼ

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -16m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

3.3 ガラスハゼ

名前の通り、体がガラスのように透き通っていて、とてもきれいなハゼである。ソフトコーラルのムチカラムツなどを探すと簡単に見つけることができる。ムチカラムツの上をチョロチョロと走りまわるその姿は、可愛らしく見ていてあきない。

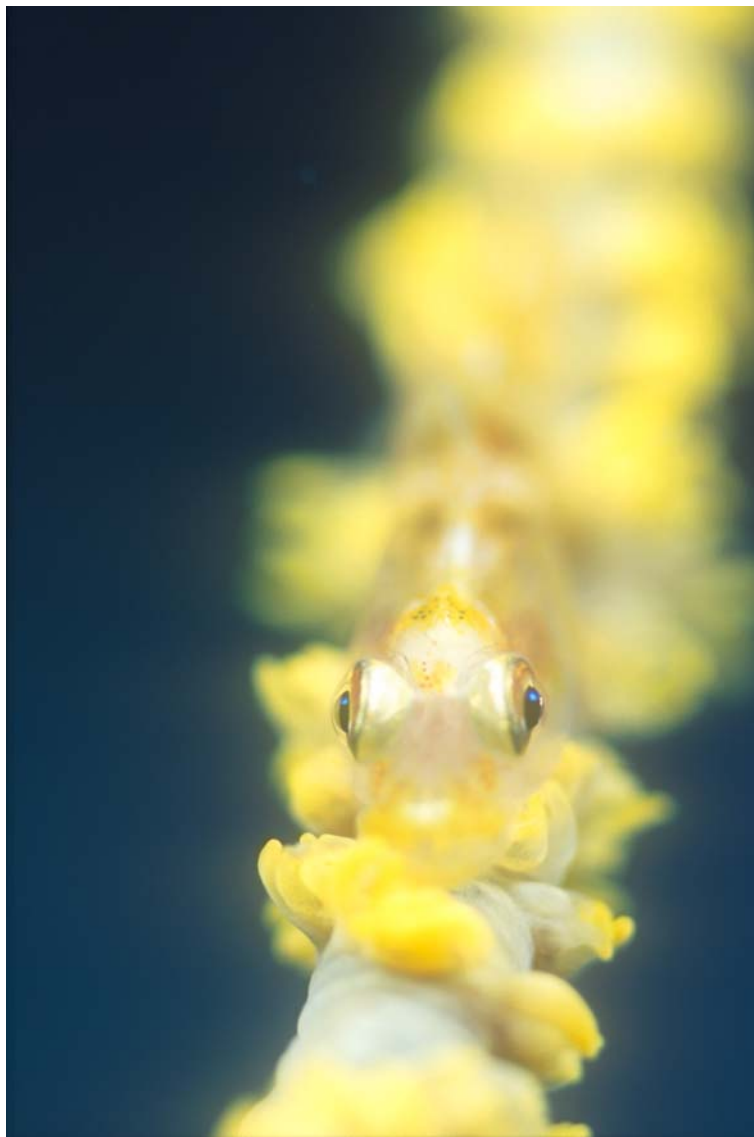


写真3.3 ガラスハゼ

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -20m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=5.6, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

3. 4 シャープアイ・ピグミーゴビー

柏島にいることを知らなかったなので、見つけたときは驚いた。シャープアイ・ピグミーゴビーと呼ばれるベニハゼの仲間で、日本ではあまり見つかっていない稀種である。写真のものはまだ子供で体の大きさは1cm位である。撮影しているうちに、ホバリングをはじめたので、その瞬間を撮ることができた。



写真3. 4 シャープアイ・ピグミーゴビー

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -14m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

3.5 オキナワベニハゼ

体の色がとても美しいハゼで、岩のくぼみなど、あまり光の当たらないところにいる。たいていは、写真の通り岩に逆さまになって胸ビレでしがみついている。明かりを嫌い、撮影するときにもライト等で照らすと逃げてしまう。暗がりではピントが合っているかどうかもわからず、勘に頼ってシャッターを切った。



写真3.5 オキナワベニハゼ

撮影者：原田 裕子

ポイント：民家下 -12m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

3.6 コクテンベンケイハゼ

岩のすき間や裏側の暗いところにいる比較的大きなハゼで、逆さまになってこちらを向いて天井についている。かなり恐がりなのか恥ずかしがり屋なのか、なかなか外にはでてこない。目が大きくてきれいな緑色をしている。



写真3.6 コクテンベンケイハゼ

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -16m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

3章

3.7 ネジリンボウ

水深10mほどの浅いところにある砂地で観察することができる。

頭が黄色で、白い体に黒い縞模様が入っている姿がかわいいハゼである。黒い縞がねじれているように見えるところが名前の由来と思われるが、よく観察すると黒い縞はねじれていない。わりと派手な模様に見えるが、砂地では見事な保護色となり慣れないと見つけることができない。ニシキテッポウエビと共生している。



写真3.7 ネジリンボウ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -12m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

3. 8 ヒレナガネジリンボウ

ネジリンボウ属の一種だが、背ビレが長く伸びているのが特徴である。水深20mほどの砂地に生息している。

10年ほど前まで標準和名が決まっていなかった。英名はBlackrayed Shrimpgobyとして知られていた。



写真3. 8 ヒレナガネジリンボウ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -24m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

3.9 キツネメネジリンボウ

ネジリンボウ属の一種で、柏島で新種記載された。他の地域での観察例は、ほとんどない。普通のネジリンボウと違って頭が黄色くない、目のところに黒い縞模様があるといった特徴がある。水深30mほどの比較的深い砂地で観察することができる。

この写真では、右下に紅白のテッポウエビがかすかに写っているが、これが共生しているランドール・ピストルシュリンプである。



写真3.9 キツネメネジリンボウ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -24m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

3. 10 ヤシャハゼ

夜叉という恐ろしげな名前がついている。体に入った赤い縞模様と黄色い目が名前の由来か。

ホバリングしている姿を見れば、ネジリンボウ属の一種であることが納得できる。ヒレナガネジリンボウと同じく、背ビレが長く伸びている。沖縄や慶良間諸島より北では、ほとんど見ることができないが、柏島では例外的にたくさんの個体がいる。



写真3. 10 ヤシャハゼ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -30m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=5.6, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

3. 11 アケボノハゼ

水深30mより深いところで観察することができるハゼである。急な岩の斜面の下にある砂だまりで見られ、外敵が近づくと穴に逃げ込む。写真撮影するには、警戒しないようにゆっくりアプローチしなければならない。共生ハゼと同様のかけひきが必要となる。

体は、クリームがかった白と濃い紫がグラデーションになっている。腹ビレ、尾ビレ、背ビレは、暗赤色を鮮やかな青が縁取っている。上品できれいな色のハゼだが、水面からの日光が届きにくい深度では、見つけにくい色になっている。



写真3. 11 アケボノハゼ

撮影者：原田 淳

ポイント：勤崎 -33m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

3. 12 シコンハタタテハゼ

2002年の春, 突然柏島に姿を見せて, 大きな話題となった. 日本では, 久米島の水深60m以深で見ることができる. 海外では, パラオやポナペで見ることができる.

何回も撮影にチャレンジしたが, なかなか姿を見せてくれず, 7月になってようやく撮影できたが, 10月には姿を消して, その後, 柏島での観察例はない.



写真3. 12 シコンハタタテハゼ

撮影者: 原田 淳

ポイント: ししなかせ -37m

カメラ: Nikon F4, レンズ: AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング: Nexus F4Pro, ストロボ: SB-105, フィルム: RVP

絞り: f=11, シャッタースピード: 1/60, 発光量: TTL

3章

3.13 ハタタテハゼ

石の斜面やその間の砂地に巣穴を持ち、ふだんはホバリングしている。警戒すると、巣穴に逃げ込む。

グラデーションがきれいなハゼだが、柏島ではたくさん見ることができる。秋には、幼魚がコロニーを作っているのも観察することができる。伊豆では、ほとんど見ることができない。



写真3.13 ハタタテハゼ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -12m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

3.14 ハナハゼ

輝くような青い体色がきれいなハゼである。中層をホバリングし、遠くからでも見つけるのが容易だが、警戒心が強く、すぐに巣穴に逃げ込むので、撮影は決して簡単ではない。



写真3.14 ハナハゼ

撮影者：原田 淳

ポイント：さるがうど -12m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

3章

3. 15 カタボシオオモンハゼ

石の間の砂地などを探すと, ちょこちょこ動くのを見つけることができる. 大きくなるとかわいくないので, 小さな個体をねらった.



写真3. 15 カタボシオオモンハゼ

撮影者: 原田 淳

ポイント: 後浜 -18m

カメラ: Nikon F4, レンズ: AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング: Nexus F4Pro, ストロボ: SB-105, フィルム: RVP

絞り: f=11, シャッタースピード: 1/60, 発光量: TTL

3.16 コバンハゼ

柏島ではサンゴの中をのぞいてみると、すぐにコバンハゼを見つけることができる。しかし、撮影するのは意外と難しく、撮りやすい個体を見つけて、じっくり時間をかけなければ、なかなかものにすることができない。サンゴの中を移動するコースを予測し、じっくり待ってようやく撮ることができた。



写真3.16 コバンハゼ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -6m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

3. 17 オオメハゼ

オキナワベニハゼと同様, 岩のくぼみなど, あまり光の当たらないところにいる. 小さなハゼだが, 鮮やかな赤い斑紋がきれいである. それほど動かないので, 撮影は比較的容易である.



写真3. 17 オオメハゼ

撮影者: 原田 淳

ポイント: 勤崎 -13m

カメラ: Nikon F4, レンズ: AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング: Nexus F4Pro, ストロボ: SB-105, フィルム: EBX

絞り: f=11, シャッタースピード: 1/60, 発光量: TTL

3. 18 ウミタケハゼ

深いところまである種のエビを探しに行ったときに見つけた。ホヤの仲間についている。シャッターを切る瞬間にヒレを全開にした。



写真3. 18 ウミタケハゼ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -42m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

3. 19 アカスジウミタケハゼ

ソフトコーラルの一種であるウミサカの中にひそんでいた。それほど敏感なハゼではないが、性急に距離を詰めようとするとうミサカの中をちよろちよろと動く。撮影距離の短いレンズで2倍撮影したので、構図を決めるのにかなりの時間がかかった。



写真3. 19 アカスジウミタケハゼ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -18m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

3. 20 アオイソハゼ

岩のすき間などで見ることができる普通種である。名前と違って、透明な体に赤い斑紋がある。比較的簡単に撮影することができる。



写真3. 20 アオイソハゼ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -12m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

4章 柏島のエビ

水中写真の被写体としてエビは人気がある。一般によく知られている車エビや伊勢エビの姿が、いわゆるエビの形として認識されていると思われるが、本章に取り上げる中には一見してエビと見えない写真もある。また、形だけでなく色や模様もバリエーションに富んでいる。こうした色や形が水中写真を撮るダイバーの心をくすぐるのである。今回、被写体となったエビは最大でも5cmほどしかない。等倍撮影か2倍撮影した写真がほとんどなので、体長は2cm足らずのものが大半である。

本章で紹介するエビは、別の生物を宿主としているものがほとんどである。魚にとってエビは、おいしいごちそうなので魚に見つからないように隠れるか擬態することが、エビが自然界で生き抜くためには必要となる。写真にすると、とても派手な色や模様をしていても、背景となる宿主をうまく利用した忍者のような巧みな擬態となっている。

隠れていたり擬態しているエビを見つたら撮影を始める。魚に比べると動かないように思われるが、不用意に刺激してしまうと撮影しにくい場所に隠れてしまうことがあるので、できるだけ静かにアプローチすることが大切である。また、2倍撮影になると被写界深度が浅くなり、フォーカスの合う範囲が限られるので集中力が求められる。また、暗いところで小さなエビの目の中心にフォーカスを合わせるには、撮影の補助となるライトが必要となることもある。

また、宿主の中には毒を持つ生物も多いため、撮影に夢中になって猛毒のあるトゲやポリプに触れないように気をつけることも重要である。

¹等倍撮影とは35mmフィルム上に実際の被写体の大きさで写る撮影である。等倍撮影でフィルムの横幅いっぱいには写っていたら、その被写体は35mmの大きさだということがわかる。同様に2倍撮影で35mmフィルムの幅いっぱいには写っている場合は17mmの大きさである。

4.1 アカホシカクレエビ

透明な体に赤と白の斑紋がきれいなエビである。はさみ脚は白と青、尾扇には青と黄色の斑紋がある。魚の体についている寄生虫などをクリーニングするエビとして知られている。撮影した個体は、きれいな色彩のイソギンチャクについていた。



写真4.1 アカホシカクレエビ

撮影者：原田 裕子

ポイント：民家下 -20m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：E100VS

絞り：f11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

4. 2 アカスジカクレエビ

透明な体に赤い線が入っているところが名前の由来である。ウミウチワにたくさんの個体がついていた。撮影しようとするすると動くことがあるので、フォーカスを合わせてシャッターを切るタイミングに神経をつかう。ふつうに撮っても面白くないので、背景になるウミウチワの鮮やかな赤が活きるように、絞りを少し開いてソフトな雰囲気仕上げた。



写真4. 2 アカスジカクレエビ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -24m

カメラ： Nikon F4, レンズ： AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング： Nexus F4Pro, ストロボ： SB-105, フィルム： RVP

絞り： f=5.6, シャッタースピード： 1/60, 発光量： TTL

4.3 アヤトリカクレエビ

ナシジイソギンチャクに共生するエビである。宿主とよく似た色と模様になるため、慣れないと簡単には見つけられない。裏側に隠れていることもあるので、じっくり探す根気も必要である。虎柄の模様が関西のおばちゃんみたいである。体長1.5cmほどの個体を2倍撮影した。



写真4.3 アヤトリカクレエビ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -28m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

4. 4 コールマンズシュリンプ

クリーム色の体色に紫暗色の斑紋があり、脚はゼブラ模様になっている。イイジマフクロウニという猛毒を持つウニに共生しており、たいがいは写真4. 4のように2個体がペアになっている。インドネシアやフィリピンではごくふつうに見られるようだが、日本での観察例はそれほど多くない。そのため、和名はまだ決定していない。宿主のイイジマフクロウニは比較的深いところにいる。



写真4. 4 イイジマフクロウニ

撮影者：原田 淳

ポイント：ししなかせ -35m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

4.5 フリソデエビ

はさみ脚が和服の振り袖のように見えるところから和名がついた。その美しい名前と姿に似合わず食欲が旺盛で、自分の体よりも大きいヒトデをひきちぎって食べる姿を観察することができる。



写真4.5 フリソデエビ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -7m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

4.6 ガンガゼエビ

ウニの一種であるガンガゼに共生しており、常にとげの根元の方に頭を向けている。紫色の体色に白の縦帯がある。撮影しようとする、エビが動くだけでなく、ガンガゼもとげを動かすことがあるので、撮影はそれほど簡単ではない。



写真4.6 ガンガゼエビ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -12m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8

ストロボ：SB-105, フィルム：RDPIII

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

4.7 ガンガゼカクレエビ

ガンガゼエビと同様にガンガゼに共生しており、常にとげの根元の方に頭を向けている。ガンガゼエビよりも細身で、濃紫色に細い白帯というシンプルな模様である。何か近づくとガンガゼのとげの間を動くため、撮影は簡単ではない。体長1cmほどの個体を2倍撮影した。

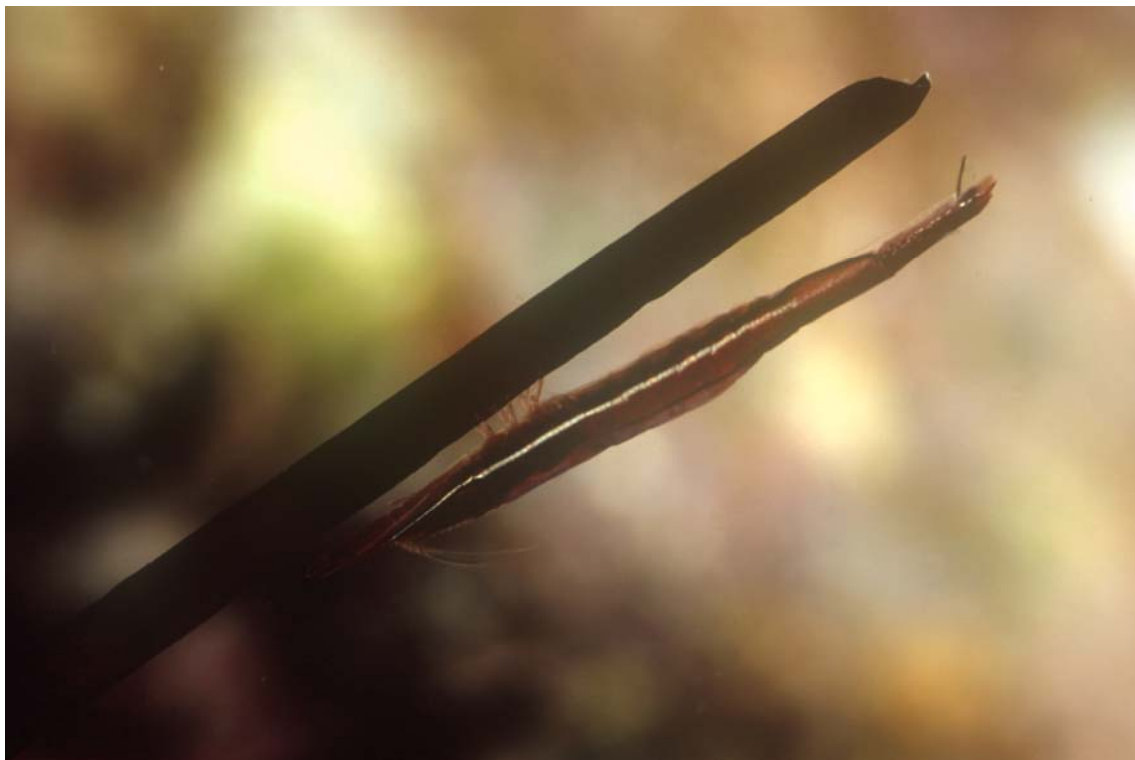


写真4.7 ガンガゼカクレエビ

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -15m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

4.8 ゴルゴニアンシュリンプ

これまで日本での観察例が少なく、和名は決まっていない。額角が針のように長く、一見するとエビには見えない。オドリカラムツなどのウミカラムツ類に潜んでいる。擬態が巧妙なため、見つけるのは非常に困難である。



写真4.8 ゴルゴニアンシュリンプ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -25m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8

ストロボ：SB-105, フィルム：RDPIII

絞り：f11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

4.9 ヒトデヤドリエビ

直径15cmほどのボール状をしたマンジュウヒトデに共生していた。多くの場合、ヒトデの裏側に隠れている。体色はバリエーションが豊富で、ひとつのヒトデについている個体でも色や模様が異なっていることがある。外敵の気配を感じると瞬間移動のように速く動くことがある。写真4.9は1cm足らずの個体を2倍撮影したものである。



写真4.9 ヒトデヤドリエビ

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -7m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

4.10 イソギンチャクエビ

きれいなサンゴイソギンチャクに共生していた個体である。透明な体に白の斑紋があり、脚には濃紺色の帯がある。この個体は1cmほどと小さいため透明感がある。成長すると白の斑紋は大きくなり、脚の濃紺色の帯も太くはっきりしてくる。

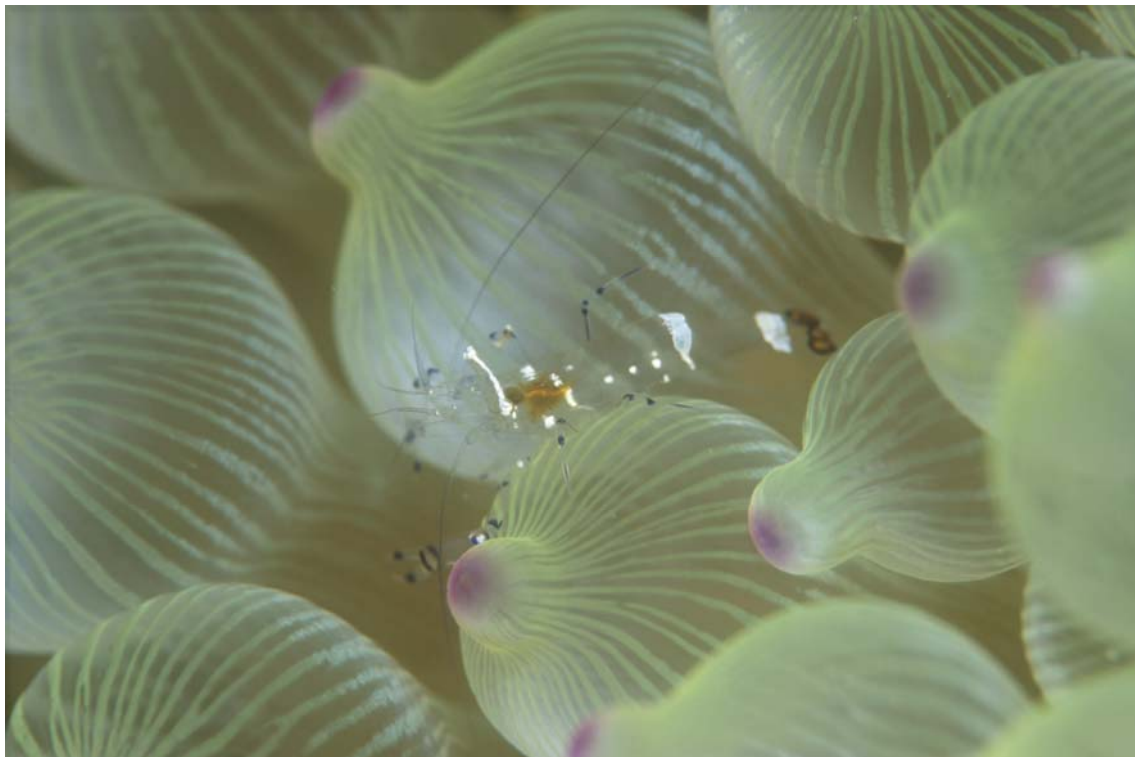


写真4.10 イソギンチャクエビ

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -7m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=5.6, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

4. 11 カザリイソギンチャクエビ

イソギンチャクに共生している。透明な体に白と暗褐色の細かい斑点が脚や尾扇にあるのが特徴である。宿主のイソギンチャクがきれいな紫色をしており、ちょうどいい背景となった。



写真4. 11 カザリイソギンチャクエビ

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -17m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

4.12 キサンゴカクレエビ

キサンゴというサンゴの一種に共生する。串本や紀伊大島では比較的良好に見られるが、柏島ではそれほど多くない。ずんぐりとした体をしており、濃淡の縞模様がある。エビの体やキサンゴについている白い粒は、着底するときに巻き上げてしまった砂粒である。



写真4.12 キサンゴカクレエビ

撮影者：原田 裕子

ポイント：民家下 -28m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

4. 13 コガラシエビ

岩のくぼみについていたウミシダの下で見つけた個体である。独特の色と形から、以前はワリバシエビと呼ばれていたこともある。日本では奄美大島や沖縄での観察例はある、それ以外ではあまり見ることができないエビである。



写真4. 13 コガラシエビ

撮影者：原田 淳

ポイント：勤崎 -13m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

4. 14 マガタマエビ

シラヒゲウニのとげの間に潜んでいる小さなエビで、簡単には見つけることができない。また、見つけても次の瞬間に飛ぶように速く移動してしまうことがあるため、撮影は簡単ではない。よく見ると愛嬌のある姿形をしている。



写真4. 14 マガタマエビ

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -6m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

4. 15 ムチカラマツエビ

ムチカラマツ類に共生し、慣れてくると比較的簡単に見つけることができる。透明な体に黄色の帯が入っているが、宿主の色によって白い個体も見られる。それほど動きがないので、撮影は難しくない。



写真4. 15 ムチカラマツエビ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -12m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

4. 16 オドリカクレエビ

イソギンチャクなどに共生し、魚の体についた寄生虫などをクリーニングするエビとして知られる。客である魚を誘うように体をゆらゆら揺らすところから名前がついた。イソギンチャクの周囲を泳ぐ姿を観察することもできる。

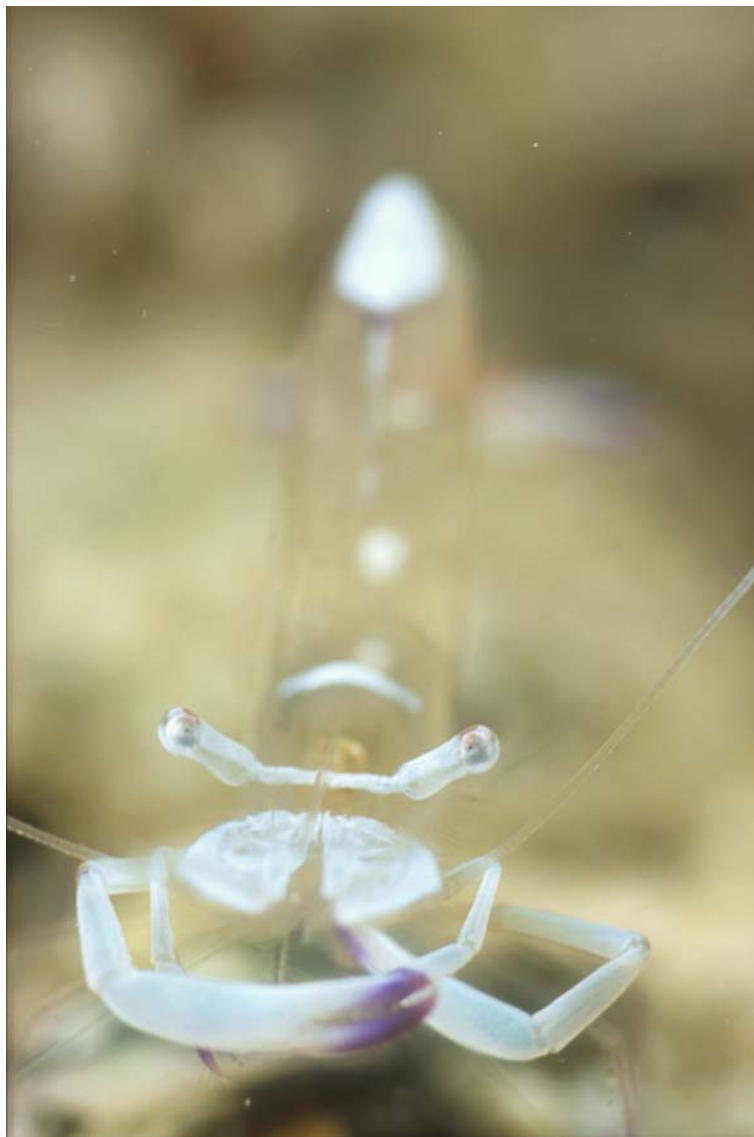


写真4. 16 オドリカクレエビ

撮影者：原田 淳

ポイント：民家下 -14m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

4. 17 トガリモエビ

額角が長くとがっている。ヤギ類に共生して、宿主によって体色の変異が見られる。この個体は透明感のある淡いピンクである。ストロボの光を嫌って裏に回ってしまうため、撮影には根気が必要である。



写真4. 17 トガリモエビ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -42m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

4. 18 トゲツノメエビ

体から出ている細かなとげと突き出した目が特徴的なエビである。白い体色にオレンジと青の斑点が美しい。サンゴのがれきや岩の間に隠れていることが多い。フリソデエビに対してトメソデエビと呼ばれていたこともある。



写真4. 18 トゲツノメエビ

撮影者：原田 裕子

ポイント：民家下 -12m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

4. 19 ウミシダヤドリエビ

柏島では, ウミシダを探せば高い確率で見つけることができる. 宿主の色によって体色の変異がみられる. ウミシダの形をいかした構図を工夫した.



写真4. 19 ウミシダヤドリエビ

撮影者: 原田 裕子

ポイント: ししなかせ -17m

カメラ: Nikon F4, レンズ: AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング: Nexus F4Pro, ストロボ: SB-105, フィルム: RVP

絞り: f=11, シャッタースピード: 1/60, 発光量: TTL

4. 20 ウミウシカクレエビ

ニシキウミウシやバイカナマコと共生する。体色は宿主によって変異し、模様にも多少のバリエーションがある。背景のオレンジ色は、宿主のバイカナマコの体色である。



写真4. 20 ウミウシカクレエビ

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -8m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

5章 柏島のカニ・異尾類

この章では、カニと異尾類について取り上げる。カニは一般的に知られているが、異尾類は認知度が低い。異尾類で、よく知られているものはヤシガニだが、その他にはヤドカリやコシオリエビの仲間が属する。本章では、甲幅2cmに満たない小さなものを等倍や2倍撮影した写真により紹介する。

生息している環境は、サンゴやソフトコーラル、ウニの仲間など別の生物を宿主としているものが多い。エビと同様にカニも魚にとってごちそうなので、擬態したり隠れることが生きていくために必要なのである。

学術的な観点からすると、カニの甲羅が見えるように正面斜め上方から撮影するのがいいと思われるが、それでは写真として面白みに欠ける場合がある。本章では、学術的な意味合いよりも、構図を優先して写真を選んでいるので、その点をご了承いただきたい。

生息している環境や生態によって、撮影が難しくなることもある。サンゴガニを撮影する場合には、サンゴによる影ができないようにライティングに配慮し、撮影しやすい場所に出てくるのをじっと待たなければならない。宿主の中には毒を持つ生物も多いため、猛毒のあるトゲやポリプに触れないように気をつけることも大切である。

5.1 アミメサンゴガニ

サンゴの間に潜んでおり、網目模様がスパイダーマンみたいである。サンゴガニの仲間は、サンゴに危害をくわえるオニヒトデを撃退することが知られている。サンゴの間にいる生物に共通して言えることであるが、きれいに撮影することができる位置に出てきている個体に出会わないと、どんなにがんばってもいい写真にはならない。撮影に際してはサンゴを傷つけないように気をつけなければならない。



写真5.1 アミメサンゴガニ

撮影者：原田 淳

ポイント：勤崎 -6m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

5. 2 アナモリチュウコシオリエビ

たまに全身を見せることがあるが、ふだんは穴の中から外の様子をうかがうようにしている。黄色いはさみ脚が穴から出ているのを目印に見つけることができる。体色は赤く、2倍撮影すると、はさみ脚に生えている毛の先端が青いことがわかる。



写真5. 2 アナモリチュウコシオリエビ

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -20m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

5.3 Enneopagurus属の一種

ホンヤドカリ科のEnneopagurus属の一種である。透明感のある体に赤褐色の斑紋がある。琉球列島での観察例があるが、和名はまだない。体長1cmほどの個体を2倍撮影した。白い砂地に白い貝殻を背負っていたので、背景を活かすために絞りを開いて撮った。



写真5.3 Enneopagurus属の一種

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -18m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=5.6, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

5.4 ヒメキンチャクガニ

壊れたサンゴの裏などに生息している。はさみ脚で持っているのは、カニハサミイソギンチャクである。どこで自分の体のサイズに合ったイソギンチャクを見つけてくるのか不思議である。危険を感じるとはさみ脚のイソギンチャクを振りかざして身を守ろうとする。彼らにとっては命がけの防御行動であるが、見方によっては、チアガールがポンポンを振っているようにも見えてかわいい。体色は地味だが、はさみ脚のつけ根の紫色がおしゃれである。

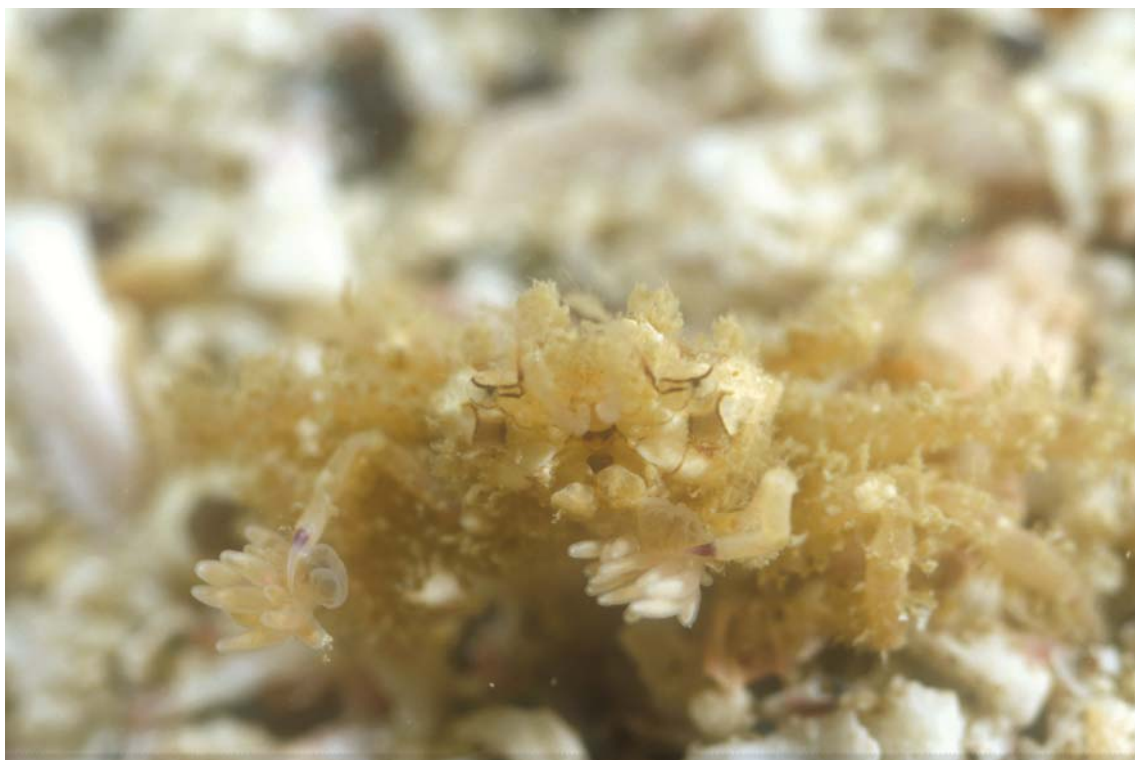


写真5.4 ヒメキンチャクガニ

撮影者：原田 淳

ポイント：さるがうど -20m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：E100VS

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

5.5 ヒメサンゴガニ属の一種

サンゴガニの一種である。透き通るような白い体に青と赤の斑紋が美しい。柏島ではサンゴの間を探すと、かなりの確率で見つけることができる。サンゴの間に潜んでいる生物の撮影は、ストロボの光をうまく回り込ませることがポイントになる。この撮影では、ストロボを2灯使っている。5mm足らずの個体を2倍撮影した。

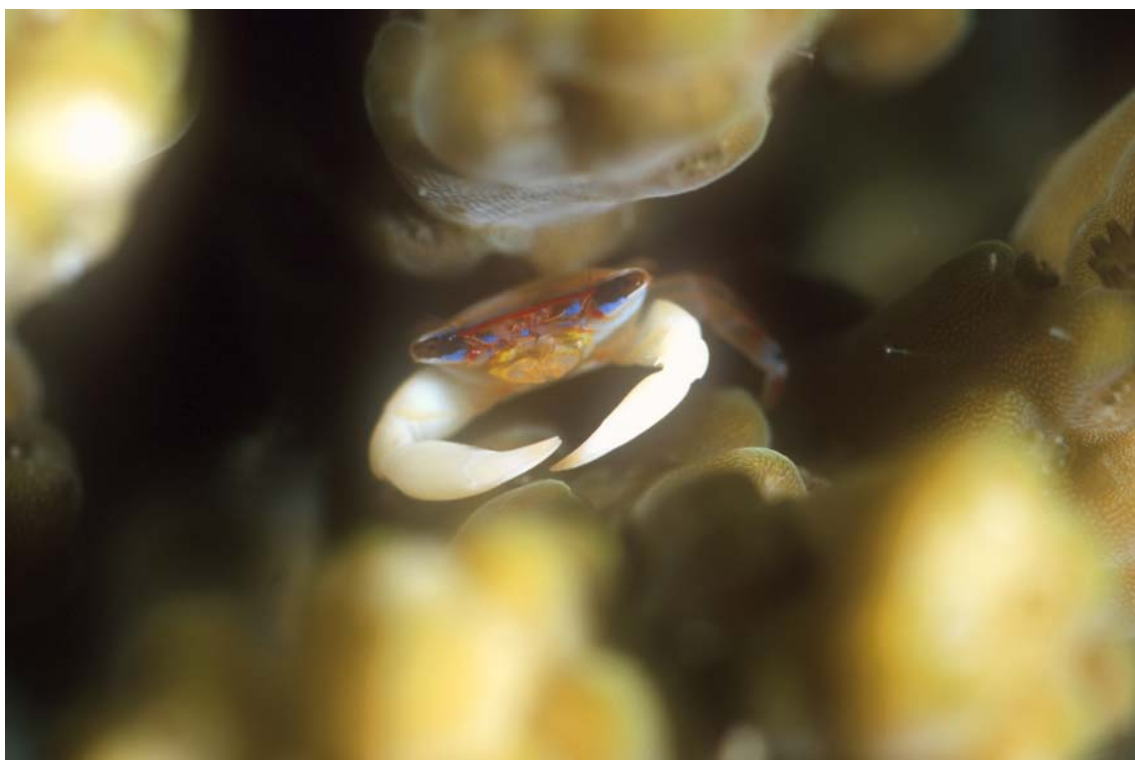


写真5.5 ヒメサンゴガニ属の一種

撮影者：原田 淳

ポイント：勤崎 -6m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

5. 6 イボイソバナガニ

ムチカラマツ類に共生する。歩脚は長く宿主につかまるのに適している。もう少し成長してくると、体色の緑色が深くなり、黄色と緑のツートンカラーがはっきりしてくる。この個体は雌らしく額角が短い。雄であればもう少し額角が長くなる。体長1cmほどの個体を2倍撮影した。



5. 6 イボイソバナガニ

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -30m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

5.7 イソコンペイトウガニ

名前の由来はお菓子の金平糖から来ている。ウミトサカに共生している。宿主にたいへんうまく擬態しており、よく探さないと見つけられない。体に赤い縞模様があるが、これも擬態に一役かっている。甲幅が5mmほどの個体を2倍撮影した。

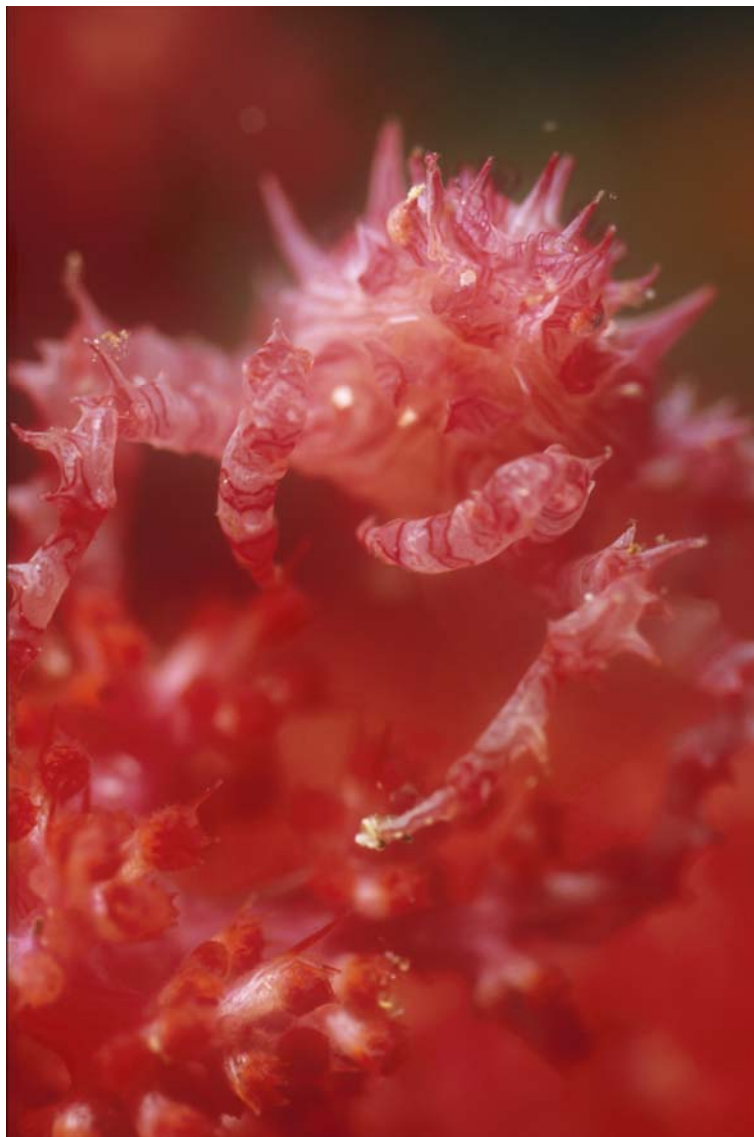


写真5.7 イソコンペイトウガニ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -30m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

5.8 イソコンペイトウガニ

イソコンペイトウガニがウミトサカのポリプによく似た擬態をしているということがわかる。白いのは別の個体ではなく、脱皮したばかりの殻である。過去の自分の姿を見ているということになる。

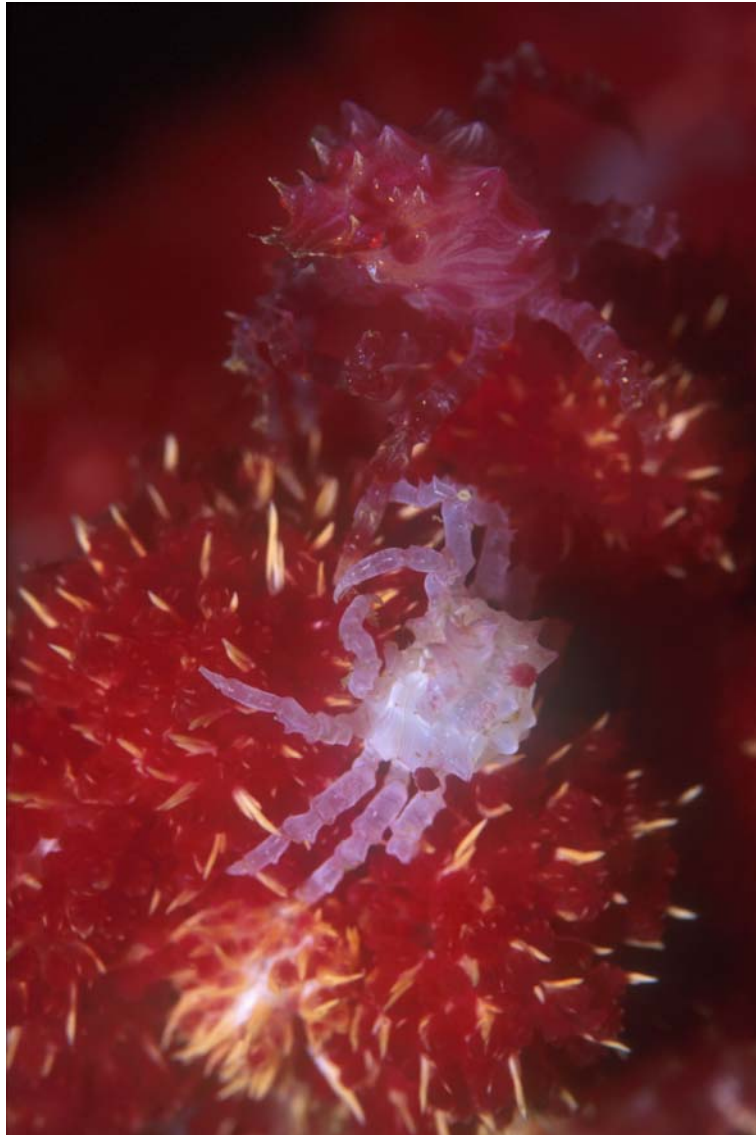


写真5.8 イソコンペイトウガニ

撮影者：原田 裕子

ポイント：ししなかせ -17m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

5.9 カンザシヤドカリ属の一種

塊状サンゴにカンザシゴカイ類が開けた穴にすむヤドカリの仲間である。カンザシヤドカリの仲間は、貝殻を背負うのではなく、地球を背負っていると言える。触角の羽状毛で捕らえたプランクトンなどをえさにしている。危険を感じると、完全に穴の中に隠れてしまうので、撮影にはねばりが必要である。



写真5.9 カンザシヤドカリ属の一種

撮影者：原田 淳

ポイント：民家下 -10m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

5. 10 キモガニ

サンゴの間にすんでいるカニである。宿主となるサンゴの色によって体色が変わる。撮影しにくい場所にいることが多いが、サンゴの穴についており、面白い構図のカットを撮ることができた。



写真5. 10 キモガニ

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -8m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

5. 11 キンチャクガニ

転石やサンゴのがれきの下に生息する。はさみ脚でカニハサミイソギンチャクを持っており、危険を感じるとイソギンチャクを振り回して身を守ろうとする。お多福のような模様に見えるが、目は笑っていない。



写真5. 11 キンチャクガニ

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -12m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：E100VS

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

5. 12 コホシカニダマシ

名前にカニダマシとあるように、カニではなく異尾類である。クリーム色がかった白い体色に赤い斑点が美しい。イソギンチャクの周辺部の触手の間に共生している。甲幅5mmほどの個体を2倍撮影した。



写真5. 12 コホシカニダマシ

撮影者：原田 淳

ポイント：勤崎 -20m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

5. 13 コシオリエビの仲間

ウミトサカのポリプの間にはいたコシオリエビの仲間である。体色は宿主と同じような乳白色をしており、体やはさみ脚を覆っているトゲのような毛は、宿主のポリプの色に似た赤褐色をしている。絞りを開いて、背景をソフトに仕上げた。

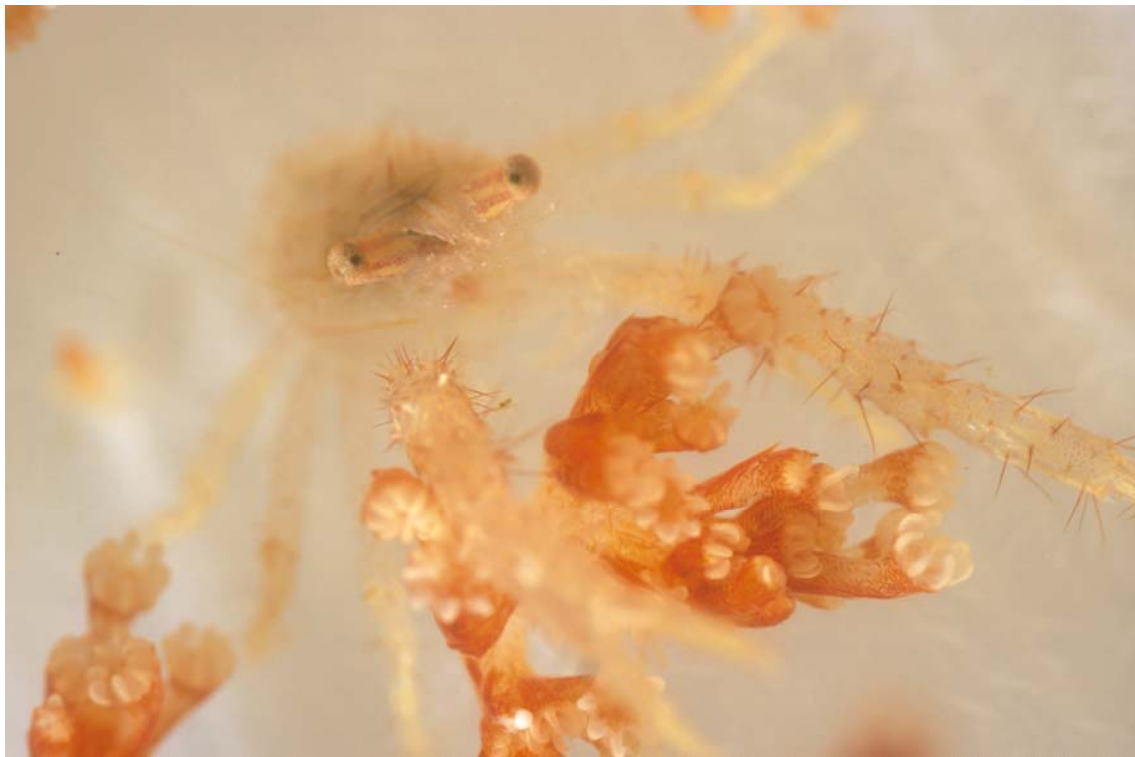


写真5. 13 コシオリエビの仲間

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -24m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=5.6, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

5.14 クビナガアケウス

宇宙からやってきたと言われれば、そうかなと思わせるほどの不思議なフォルムをしている。写真のように、はさみ脚以外の歩脚を使って、移動するが、その移動の仕方普通のカニやヤドカリとは少し異なっている。



写真5.14 クビナガアケウス

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -10m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

5. 15 モンハナシャコ

シャコの仲間が大きくなる種で, 成長すると体色は鮮やかな緑になる. 写真は, まだ若く小さな個体なので体色は鮮紅色をしている. 外敵がいると巣穴から頭を出して周囲を警戒する様子を見せるが, 時間をかけて観察していると巣穴から自分で砂を運び出す姿を見ることが出来る.



写真5. 15 モンハナシャコ

撮影者: 原田 淳

ポイント: 後浜 -20m

カメラ: Nikon F4, レンズ: AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング: Nexus F4Pro, ストロボ: SB-105, フィルム: RVP100

絞り: f=11, シャッタースピード: 1/60, 発光量: TTL

5. 16 ナマコマルガザミ

バイカナマコなどに共生するカニである。したがって、背景はバイカナマコの体である。宿主の色によって体色の変異するが、この個体は宿主と合っていない色をしている。



写真5. 16 ナマコマルガザミ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -8m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

5. 17 オオケブカガニ

名前のとおり全身を長い毛がおおっている。岩の亀裂や石のすき間などに生息する。成長すると大きくなる種だが、写真の個体は甲幅1cm足らずである。



写真5. 17 オオケブカガニ

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -8m

カメラ：Nikon F4, レンズ：AF Micro-Nikkor 105mm f2.8D

ハウジング：Nexus F4Pro, ストロボ：SB-105, フィルム：RVP

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

5. 18 オランウータンクラブ

全身が毛に覆われていて、はさみ脚と第一歩脚を手前にぶら下げている姿がオランウータンを連想させることから、この名前と呼ばれている。クモガニ属の一種と考えられているが、和名はまだない。



写真5. 18 オランウータンクラブ

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -15m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

5. 19 オルトマンワラエビ

エビという名前がついているが, 分類的にはエビよりもコシオリエビ類に近く, 異尾類とされている. ウミトサカやウミウチワなどのソフトコーラルを探すと比較的簡単に見つけることができる. 歩脚, はさみ脚ともとても長いのが特徴である.



写真5. 19 オルトマンワラエビ

撮影者: 原田 淳

ポイント: 後浜 -20m

カメラ: Nikonos RS, レンズ: R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ: SB-105, フィルム: RVP100

絞り: f=11, シャッタースピード: 1/60, 発光量: TTL

5. 20 オルトマンワラエビ

オルトマンワラエビは、歩脚、はさみ脚の長さが特徴的である。背景に花が開いているように見えるのは、ウミサカのポリプである。



写真5. 20 オルトマンワラエビ

撮影者：原田 裕子

ポイント：後浜 -20m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

5章

5. 21 ピンクスクワットロブスター

スリバチカイメンの溝の間に共生するコシオリエビの仲間である。体全体を白い長毛が覆っており、ピンクの体色と体の縁や脚を彩る青紫色が美しい。日本での観察例はほとんどなかったが、柏島で見つかり話題となった。



写真 5. 21 ピンクスクワットロブスター

撮影者：原田 淳

ポイント：民家下 -22m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

5. 22 ゼブラガニの抱卵

ゼブラガニはラップウニやイイジマフクロウニなどに共生し、宿主のトゲの間に生息する。はさみ脚で宿主のトゲを刈り取るので、その痕跡が見つかる際の目安となる。宿主となるウニには猛毒がある場合もあるので、注意が必要である。この個体は腹部に紫色の卵を抱えていた。



写真5. 22 ゼブラガニの抱卵

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -22m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=11, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

第6章 柏島の貝・ウミウシ

この章では、貝とウミウシについて取り上げる。ウミウシは貝殻のない貝と言われており、近い種であることが知られている。本章では、貝やウミウシを等倍や2倍撮影した写真により紹介する。

本章で取り上げた貝は、ソフトコーラルを宿主としているもので、こうした貝は色や模様がきれいである。ウミウシは水中写真の被写体として人気が出てきているが、色や模様がきれいで透明感があるためであろう。

学術的な観点からすると、ウミウシを撮影する場合には、触角とえらの両方が見えるように撮るのがいいとされているが、構図を優先して正面から触角に焦点を合わせて撮ったものが多くなっている。

ウミウシは意外と動きが速く、撮影にもたついていると向きを変えてしまうこともある。2倍撮影をする際などは、手際よく撮影することが求められる。

6章

6.1 コダマウサギガイ

コダマウサギガイはウミトサカなどに共生し、宿主のポリプに非常にうまく似せて擬態する。5mmほどの小さな個体を2倍撮影した。赤を強調するため、絞りを開き気味に設定した。



写真6.1 コダマウサギガイ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -6m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=5.6, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

6.2 ベニキヌツツミガイ

外套幕の赤が鮮やかな貝で, ウミウチワなどに共生する. 構図を工夫して, 2cmほどの個体を2倍撮影のフレームに収めた.



写真6.2 ベニキヌツツミガイ

撮影者: 原田 淳

ポイント: 後浜 -28m

カメラ: Nikonos RS, レンズ: R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ: SB-105, フィルム: RVP100

絞り: f=11, シャッタースピード: 1/60, 発光量: TTL

6.3 ムラクモキヌツツミガイ

ヤギ類の根本に共生している個体を見つけた。5mmほどの小さな個体で、透明感のある白がきれいである。



写真6.3 ムラクモキヌツツミガイ

撮影者：原田 淳

ポイント：後浜 -14m

カメラ：Nikonos RS, レンズ：R-UW AF Micro-Nikkor 50mm f2.8 + TC-RS

ストロボ：SB-105, フィルム：RVP100

絞り：f=5.6, シャッタースピード：1/60, 発光量：TTL

謝辞

柏島でのダイビング・写真撮影に関して、いつも懇切にサポートしてくださっているフィンハウスみなさまに深く感謝する。

写真の展示をすることを勧めてくださり、展示方法について多くのご指導をいただいた河津哲 高知工科大学名誉教授に深く感謝する。

写真展を開催するにあたり、浜田正彦統括部長をはじめ、情報図書館の職員のみなさまには、広報や写真の展示で非常にお世話になった。ここに深く感謝する。

また、高知工科大学の教職員のみなさま、学生諸君は、写真展に来場し、さまざまな感想やご意見を寄せてくださった。

ここに記して、以上の方々に深く感謝の意を表す。

参考文献

- 益田 一 他. (1994). 「日本産魚類生態大図鑑」 東海大学出版会
岡村 収 他. (1997). 「日本の海水魚」 山と溪谷社
峰水 亮 他. (2000). 「海の甲殻類」 文一総合出版

柏島の海

発行： 平成20年2月(初版)

著者： 原田 淳 ・ 原田 裕子

写真： 原田 淳 ・ 原田 裕子

e-mail: junn.harada@nifty.com